

### <講演>ノイズとしての二項対立：漢詩をもっと自由に読むために

遠藤, 星希

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

98

(開始ページ / Start Page)

2

(終了ページ / End Page)

20

(発行年 / Year)

2018-07-18

## ノイズとしての二項対立

——漢詩をもっと自由に読むために——

遠藤 星希

### 一、本日お話しする内容の要点

ただいま御紹介にあずかりました遠藤と申します。専門は漢文学で、特に唐代の詩や散文、江戸から明治にかけての日本漢詩を中心に研究しています。その中でも特に中心的に研究しているのは、李賀という唐代の詩人です。二十七歳で亡くなった夭折の詩人であり、幻想的な作風で知られています。本日はこの李賀の詩についてお話をしようかとも思ったのですが、断念いたしました。理由は単純で、李賀の詩は難解であり、かつ長編が多く、限られた時間内でその魅力を十分にお伝えするのは私の手に余ると感じたからです。そこで本日は、より幅広く「漢詩の読み方」についてお話しすることにいたしました。

本日お話しする内容の要点は、以下の二点です。

①漢詩を読むとき、二つの項目（二つの異なる解釈や、原因と結果など）を対立としてとらえると、その対立が時にはノイズとなつて鑑賞を妨げる。

②漢詩を書いているとおりに読もう。

①に関連して、「二項対立」というフレーズが本日の演題に含まれていますが、ジャック・デリダがどうか、脱構築がどうか、そのような小難しい話は特にいたしません。ここにいる「二項対立」というのは、「二つの概念が対立や矛盾の関係にあること」<sup>1</sup>位の辞書的な意味にとらえて頂ければと思います。なお、①で述べた「二つの異なる解釈」の対立は、辞書的な「二項対立」の意味ともややズレますが、ここでは便宜的に含めて取り扱うことにいたします。

私は自分のゼミの学生に発表させたりレポートを書かせたり



2017年度 法政大学国文学会大会

する際に、必ず義務づけることがあります。それは、自分が担当する作品（主に漢詩）の既存の日本語訳をなるべく多く集め、それらを比べて解釈が異なる箇所を見つけること、及びその解釈の違いについて、論拠を挙げながら自身の見解を述べることです。

課題を出すたびに、学生の皆さんは指示どおりに既存の訳を集め、解釈の違いを発見してくれるのですが、ただ多くの場合、そこから学生は「さて、この○種類の解釈のどれが正しいのであろうか」という問題の立て方をします。正解を決めないと、どうも落ち着かないようなのです。ゼミの授業の最後に提出してもらったりアクションペーパーにも、「今日の漢詩は、結局どの解釈が正しいのか分からず、混乱した」という類のコメントがしばしば紛れこんでいます。そのたびに、私はゼミ生に次のように伝えます。「正しい解釈というものに拘ら<sup>な</sup>ないでほしい。間違った解釈は確かに存在する。引用や典故を見逃していたり、そもそも言葉の意味をはき違えていたりすれば、それは間違った解釈である。ただ、唯一の正しい解釈というものも存在しない。解釈の違いを対立としてとらえると、ノイズが発生して詩の鑑賞を妨げてしまう」のだと。

それと関連して私が主張したいのが、本日の講演の要点②として挙げた「漢詩を書いてあるとおりに読もう」です。「そんなの当たり前じゃないか」と思われた方もいらっしゃるでしょう。ところが、本日御紹介する漢詩の訳文を眺めていると、「書いてあるとおりに読む」ことが案外難しいのだ、ということに気づかされます。あまり抽象的な話ばかりでは説得力を欠

きますので、以下、いくつかの具体例に即して御説明いたしましょう。

## 二、項羽「垓下歌」の「虞兮虞兮奈若何」は疑問か？ 反語か？

最初に取り上げますのは、『史記』「項羽本紀」に見える、項羽の「垓下の歌」です。この歌を項羽が歌うのは、成語「四面楚歌」の典故となっている有名な場面ですね。楚漢戦争も終わりに近づいた紀元前二〇二年、項羽が率いる楚軍は、劉邦の率いる漢軍に垓下（現在の安徽省靈璧県の南東）で包囲され、絶体絶命の危機に陥ります。【資料A】を御覧ください。書き下し文を読み上げます。

### 【資料A】『史記』卷七「項羽本紀」より

項王の軍垓下に壁す。兵少なく食尽く。漢軍及び諸侯の兵之を囲むこと数重なり。夜漢軍の四面皆楚歌するを聞き、項王乃ち大いに驚きて曰く、「漢皆已に楚を得たるか。是れ何ぞ楚人の多きや」と。項王則ち夜起ちて帳中に飲す。美人有り、名は虞。常に幸せられて従ふ。駿馬あり、名は騅。常に之に騎る。是に於いて、項王乃ち悲歌愴慨し、自ら詩を為りて曰く、

そして「項王」（項羽を指す）は、次に示す「垓下の歌」を

歌います。

力拔山兮氣蓋世	力は山を抜き 氣は世を蓋ふ
時不利兮騅不逝	時利あらず 騅逝かず
騅不逝兮可奈何	騅の逝かざるを 奈何すべき
虞兮虞兮奈若何	虞や虞や 若を奈何せん

「わが力は山を引き抜き、わが氣迫は世の中を圧倒するほどだが、時の巡りあわせが悪く、騅も進もうとしない。騅が進もうとしないのをどうすればよからう。虞よ虞よ、お前をどうすればよからう」。以上が文字どおりの訳になります。「漢軍」すなわち敵の軍隊に包囲されている絶体絶命の状況下で、項羽が心配しているのが、自分の軍の兵士たちではなく、愛馬と愛人というの、リーダーとしてどうなのか、と思われる方がいるかもしれません、英雄の歌としてはこの方がふさわしかったでしょう。

さて、この「四面楚歌」の場面は、漢文の教材としてはお馴染みであり、高校漢文の教科書にはだいたい採録されています。ここで問題にしたいのは、「垓下の歌」の結びの句「虞兮虞兮奈若何」の「若を奈何せん」は、果たして「疑問」か「反語」かということです。実は、その説明には教科書によって差異が見られます。【資料A-①】を御覧ください。

1 可奈何 どうしようか(どうしようもない)。  
 「奈何」は反語を表す。

2 奈若何 お前をどうしようか(どうしようもない)。  
 反語「奈何」の間に目的語「若」が入った形で、同じ「奈(目的語)何」の例には「少壮幾時兮奈老何(少壮幾時ぞ老いをい  
 かんせん)」「(文選)漢武帝「秋風辞」などがある。この句は、最愛のお前をどうした  
 らよいのだろうか、どうしてやることもでき  
 ないのだ、の意。

【資料 A-①】  
 筑摩書房『古典』指導書<sup>(3)</sup>

これは、筑摩書房の高校教科書『古典』の指導書、つまり生徒が目にするのではない教員用の教授用資料から、「垓下の歌」の「可奈何」と「奈若何」の解説部分を抜粋したものです。そこには、次のように書かれています。

可奈何 どうしようか(どうしようもない)。「奈何」は反語を表す。

奈若何 お前をどうしようか(どうしようもない)。反語「奈何」の間に目的語「若」が入った形で、(中略)この句は、最愛のお前をどうしたらよいのだろうか、どうしてやることもできないのだ、の意。

このように、「反語」と明記されており。一方、【資料 A-②】第一学習社『古典 B』の指導書を見ると、やや書き方が異なっています。

雖不逝兮可奈何 二句目の「雖不逝」を重ねて用い、詩の調子のよさを出している。

「奈何」は、処置・方法を問う疑問詞。「如何」に同じ。

虞兮虞兮奈何 「虞」に二度呼びかけるのは、深い愛情と絶望の表現。「奈若何」は、「奈何」の間に目的語「若」を入れたもの。

【資料 A-②】  
 第一学習社『古典 B』指導書<sup>(4)</sup>

「奈何」については、「処置・方法を問う疑問詞」と説明されており、「反語」という表現は使われていません。同指導書に載っている、「垓下の歌」後半二句の「口語訳」でも「雖の進もうとしないのを、どうしたらよいだろうか。虞よ虞よ、おまえをどうしたらよいだろうか」となっており、疑問形で訳されています。

ただ、このように解説するものは、教科書・参考書の中では少数派です。「垓下の歌」の「奈何」は、通常は「反語」で理解されています。たとえば、「精説漢文」という参考書では、次に示しますように、「如(何(奈(何))」の「反語」の用例と

して、「垓下の歌」の「虞兮虞兮奈若何」が引かれています。<sup>(5)</sup>

048	
如 <sup>ニ</sup> 何 <sup>セシ</sup> (若 <sup>ク</sup> 何 <sup>ク</sup> 奈 <sup>ク</sup> 何 <sup>ク</sup> )	
疑問	「汝 <sup>ニ</sup> を如何 <sup>せん</sup> せん
反語	「汝 <sup>ニ</sup> をどうしようか。
	「をどうすることができようか、いやできない。」
(史記・項羽本紀) 疑問	
為 <sup>ス</sup> レ之 <sup>ヲ</sup> 奈 <sup>ム</sup> 何 <sup>カ</sup> 。	
之 <sup>ヲ</sup> を為 <sup>ス</sup> こと奈 <sup>ム</sup> 何 <sup>カ</sup> 。	
これ(別れのあいさつ)をするにはどうすればよいか。	
虞 <sup>ヤ</sup> 兮 <sup>ヤ</sup> 虞 <sup>ヤ</sup> 兮 <sup>ヤ</sup> 奈 <sup>レ</sup> 若 <sup>ク</sup> 何 <sup>カ</sup> (史記・項羽本紀) 反語	
虞 <sup>ヤ</sup> や虞 <sup>ヤ</sup> や若 <sup>ク</sup> を奈 <sup>ム</sup> 何 <sup>カ</sup> せん。	
虞 <sup>ヤ</sup> よ虞 <sup>ヤ</sup> よおまえをどうしたらよいか、いやどうしようもない。	
「若 <sup>ク</sup> の主を眺みなんぢ <sup>ニ</sup> こそシレク <sup>ニ</sup> もシ <sup>レ</sup> 」(P.123)	

日本語訳の部分をご覧ください。「虞よ虞よおまえをどうしたらよいか、いやどうしようもない」となっています。反語文である以上、これが模範的な訳し方になるわけです。

私は授業中、よく学生に次のような質問をします。「高校時代に漢文の試験で反語文を訳すとき、最後に『いや、ない(いやくない)』をつけないと減点されましたか」と。すると、大半の学生が「減点された」と答えます。もちろん、例外的な先生もいらつしやると思いますが、高校漢文の教育現場では、反語文の訳は末尾に「いやくない」がついていないと、減点するという原則があるようです。

ということは、「垓下の歌」の「虞兮虞兮奈若何」が試験に出たとき、高校の生徒は『精説漢文』のように「虞よ虞よお

まえをどうしたらよいか、いやどうしようもない」という風に訳さなければ、減点されるということになります。現場の先生にお会いした際、この点について御意見を求めると、「このように訳させないと、反語文を生徒がきちんと反語であると理解しているか、判別がつきにくいから」とお答えになることが多いです。確かに教育的な便法としては、仕方がないという側面もあるでしょう。

ただ、昔から私はこの「いやくない」という訳し方に違和感がありました。理由はシンプルで、原文には「いやくない」に相当する語がどこにも見当たらないからです。このような断定的な訳のつけ足しは、原文がもっている反語のニュアンスをかえって損なっているのではないのでしょうか。ですので、私の漢文の授業では、反語文の訳の末尾に「いやくない」をつけないで欲しいと、折にふれて学生にはお願いをしています。しかし、いざ反語文の和訳を試験問題に出すと、それでも訳の末尾に「いやくない」をつけ足している答案が後を絶ちません。私はむしろ、「いやくない」とある答案の方を減点したくなっています(実際には減点しません)。たまたま私のお願いを忘れていただけかもしれない(あるいは居眠りをして聞いていなかったか)、やはりこの現象は、高校漢文における反語の訳し方ルールの呪縛が、それだけ強固であることを示しているのです。

こうした冗長な反語文の訳し方は、教育現場だけではなく、市販されている一般向けの書籍にも見られます。極端な例を一つ御紹介しましょう。項羽の「垓下の歌」は、清代に編纂され



た古詩のアンソロジー『古詩源』にも収録されています。『古詩源』は、内田泉之助氏による全訳が集英社から出ていますので、試しに「垓下の歌」の部分を確認してみましたところ、「虞兮虞兮奈若何」は次のように翻訳されていました。

さてまた虞よ虞よ、そなたの身もはやどうにもならぬ。  
これが最期の別れであるぞ。

この訳文では、「奈何せん」（どうしたらよいか）という疑問詞のニュアンスはすっかり抜き取られており、「もはやどうにもならぬ」という結論に置き換えられています。その上、詩の原文のどこにも書かれていない「これが最期の別れであるぞ」という一文がつけ足されているため、全体として冗漫で説明的な印象を受けます。訳者はおそらく読者の感受性を信用していないのでしょうか。私には、このような「置き換え」や「つけ足し」は、余計なものに思えて仕方ありません。

そんな私の思いを見事に代弁してくれていたのが、奇しくも本学文学部日本文学科で長年にわたり教鞭を執られていた安藤信廣先生です。安藤先生は、その著『漢文を読む本』の中で、「垓下の歌」の「可奈何」と「奈若何」について、次のように書かれています。

ここでの「可奈何」は、「どうすることができようか」（疑問）ともとれるし、「どうすることができようか、いやどうにもできない」（反語）ともとれる。同じく「奈若何」も、

「あなたをどうしたらよいだろうか」（疑問）とも「あなたをどうしたらよいだろうか、いやどうすることもできない」（反語）ともとれる。それぞれどちらが正しいのか。

どちらも正しい、と言わなくてはならない。項羽の心は、愛する者のために揺れていたのだ。「どうしたらよいだろうか」と問うたとたんに、「どうしてやることもできない」という答えがかえってくる。「どうしてやることもできない」という自明の答えを知つていながら、それでも「あなたをどうしたらよいだろうか」と問いなおさずいられない。（疑問形）とも（反語形）ともとれる「奈何」のくり返し、英雄の最期の心の葛藤を、私たちに伝えてくるのである。たいせつなのは、（疑問形）か（反語形）かを区別することではない。文法や句法の知識を役立てることによって、言葉の世界——作品の世界を新しく切りひらいてゆくことだ。

この安藤先生の御指摘に、私は深い共感を覚えました。まさに「どちらも正しい」と言うべきなのです。「疑問」と「反語」とを対立的にとらえると、それはノイズとなつて、項羽の「虞や虞や 若を奈何せん」という「問い」がもっている「葛藤」のニュアンスの伝達が妨げられてしまいます。この句を訳したいのなら、「虞よ虞よ、お前をどうすればよかるう」と「書いてあるとおりに」訳せばそれで十分なのではないでしょうか。あとは読者の想像力に任せればよい、それが私のスタンスです。ついでながら、「四面楚歌」の場面の原文読解につきまして、

もう一点、類似した問題を提起いたしましょう。先ほど読みあげました『資料A』『史記』『項羽本紀』の原文に、「漢皆已に楚を得たるか。是れ何ぞ楚人の多きや」(漢皆已得楚乎。是何楚人之多也)という項羽の台詞がありました。項羽率いる楚軍を包圍しているのは漢軍のはずなのに、四方から楚の歌が聞こえてきたことに対し、いぶかる気持ちを表したものです。この「是れ何ぞ楚人の多きや」について、筑摩書房の教科書『古典』の教員用指導書では、次のように解説されています。

**3 是何楚人之多也** なんと楚の人が多いことか。  
「何々也」は疑問・反語・詠嘆を表す句法。  
いこでは詠嘆。

このように、「なんと楚の人が多いことか」を模範訳として示した上で、ここの「何々也」は「疑問」でも「反語」でもなく、「詠嘆」を表す句法であることを強調しています。この指導書に忠実に従って授業をするならば、教員は生徒に『何々也』には疑問・反語の意味もあるけれど、ここでは詠嘆なので気をつけるように」と注意を促すことになるでしょう。

しかし、ここの「何々也」を「詠嘆」に限定する必要は果たしてあるのでしょうか。直前の文は「漢皆已に楚を得たるか」(漢はすっかりもう楚の領土を手に入れたのであろうか)です。それに続いて、「どうして楚の人がこんなに多いのであろう」という風に、いぶかる気持ちが疑問形で表明されたとしても、特に違和感はありません。もちろん「詠嘆」で理解することも

可能ですが、「疑問」もしくは「反語」で理解できる余地も十分残されているはずですから。それなのに、試験でこの文を「どうして楚の人がこんなに多いのであろう」と訳した生徒が、減点(もしくはバツに)されるのならば、とても理不尽なことだと思えます。

なぜ私がこのような問題意識を抱いたかといいますと、実は中国ではこの「是何楚人之多也」という項羽の台詞が、日本とはやや異なる意味で理解されているからです。市販されている『史記』の現代中国語訳をいくつか確認してみましよう。まず一つ目、王利器主編『史記注訳』では、次のように翻訳されています。

爲什麼楚人這麼多呢？(どうして楚の人がこんなに多いのであろう?)

「爲什麼」は原文の「何ぞ」に対応する疑問詞で、「どうして」という意味、「這麼」は「こんなに」という意味です。文末に「？」がついていることからわかるように、訳者は原文から疑問の語気を読みとっています。次に挙げるのは、楊燕起注訳『史記全訳』による訳文です。

爲何楚國人有這麼多呢！(どうして楚の国の人がこんなに多いのか！)

「爲何」も「どうして」という意味の疑問詞です。楊燕起氏



の訳は、王利器主編『史記注訳』とほぼ同じですが、文末が「！」です。で、疑問と詠嘆、どちらのニュアンスも含まれているように見えます。最後に、『二十四史全訳 史記』による訳文を見てみましょう。

爲什麼楚人這麼多呢！（どうして楚の人がこんなに多いのか！）

これは「？」が「！」になっているだけで、一つ目の訳文と同じですね。やはり疑問と詠嘆、両方のニュアンスを読みとっているのでしょう。このように、これら現代中国語訳『史記』では、いずれも原文の「何」を素直に「どうして」と訳しています。中国語にはもっぱら詠嘆を表す「多麼」（なんと）という副詞もあるのですが、ここの訳文には用いられていません。ところが、日本の教育現場では「詠嘆」と教えることに過度にこだわっているように見えます。なぜ「疑問」「反語」「詠嘆」の三者択一を無理に迫る必要があるのでしょうか。「どうして楚の人がこんなに多いのか」と「書いてあるとおりに」訳しさえすれば、疑問と詠嘆、どちらにも解しうる原文の多義性を示すことができるのに、と私は常々思っています。

三、玉門関、西から見るか？ 東から見るか？

続いては、「玉門関、西から見るか？ 東から見るか？」というお話をいたします。さりげなく岩井俊二監督の映画のタイ

トル風に見てみました。取り上げますのは、【資料B】盛唐の王昌齡「従軍行」という七言絶句です。『唐詩選』に収録されていますので、日本でも広く読まれた比較的有名な詩といつてよいでしょう。それでは、書き下し文を読み上げます。

青海長雲暗雪山	青海の長雲	雪山暗し
孤城遙望玉門関	孤城	遙かに望む 玉門関
黄沙百戰穿金甲	黄沙百戰	金甲を穿つも
不破樓蘭終不還	樓蘭を破ら	ずんば終に還らず

「従軍行」の「行」は「うた」という意味ですので、詩題は「従軍のうた」とでも訳せばよいでしょうか。ただし、作者の王昌齡は、従軍したことも、西域に旅をしたこともありませんが、この詩は楽府というジャンルに属しておりまして、細かい説明は割愛しますが、とにかく和歌の「題詠」のように、あくまでフィクションとして詠まれたものとお考えください。

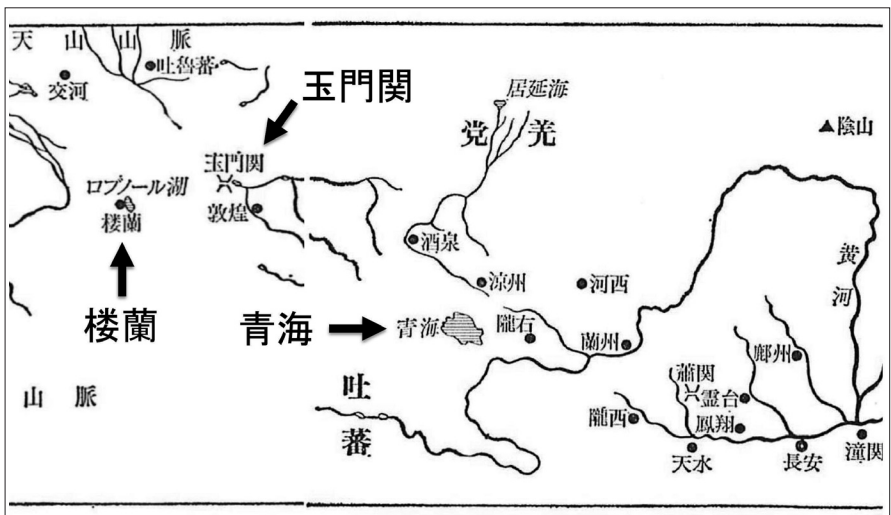
この詩を、前野直彬氏は次のように訳されています。【資料B-①】を御覧ください。

青海の上を長くたなびく雲に、雪山も暗くかげっている。私は孤城からはるかに故国のかた、玉門関を望む。黄沙の中に百度の戦いを経て、さしも堅いよろいにも穴があった。しかし楼蘭をうち破らぬうちは、断じて国には帰らないぞ。

様々な固有名詞が出てきますので、まとめて先に説明してお

きましよう。起句の「青海」は、青海省にある中国最大の湖の名です。「雪山」は、諸説ありますが、ここでは青海の北に連なる祁連山脈を指すと一般的に考えられています。承句の「玉門関」は、今の甘肅省敦煌県の西にあった関所の名で、漢の武帝の時代に設けられました。中国領土の最西端に位置しており、この関を越えるところはもう夷狄の支配する地であると人々にみなされていたようです。結句の「楼蘭」は、今の新疆ウイグル自治区にかつて存在したオアシス都市国家の名。漢の支配を受けて国名は鄯善と改められ、五世紀に滅亡しました。唐代には存在しておりません。つまり、この詩の舞台は漢代に設定されていることとなります。あるいは、唐を漢王朝に、唐に敵対した西域の国を楼蘭に各々なぞらえた、と見ることも可能でしょう。

次に、これら固有名詞の相互の位置関係を確認しておきたいと思えます。前のスライドを御覧ください。映しましたのは、漢代における西域の略図です。一海知義先生の『漢詩一日一首』から拝借いたしました。文字が小さくて申し訳ございません。「青海」「玉門関」および「楼蘭」については、一目で位置が分かるように、矢印をつけ加えさせていただきました。



西域の略図（一海知義『漢詩一日一首』より）

図の右下の端に、漢の都である長安（現在の陝西省西安市）が見えますね。青海は、そこから西北に進んだ地点にあります。玉門関は、青海のさらに西北に位置しており、そこからさらに西に向かえば楼蘭にたどり着きます。

固有名詞の相互の位置関係を把握した上で、もう一度、先ほど挙げた前野氏の訳を読み直してみよう。「従軍行」の原文と比べながら読むと、原文に書かれていない情報が、前野氏の訳文には加えられていることに、お気づきになると思います。それは、第二句の訳「私は孤城からはるかに故国のかた、玉門関を望む」の「故国のかた」です。詩の原文は「孤城遥望玉門関（孤城 遙かに望む 玉門関）」であって、望む方角は書かれていません。ところが、前野氏の訳では「故国」の方角であることが明示されています。これに従えば、「孤城」にいる兵士は、玉門関を西から眺めていることになるでしょう。

ただ、望む方角が詩の原文に書かれていない以上、玉門関を東から眺めている可能性も当然考えられるはずですが、実際、そのように解釈されている方もいらっしやいます。【資料B-②】を御覧ください。これは、日野龍夫校注「唐詩選国字解」より、王昌齡「従軍行」の承句につけられた日野氏の注を抜粋したものです。

承句。国字解は、「孤城」は玉門関からさらに西方にあり、そこから東をふり返つて、はるかに玉門関を望む、と解している。起句にいう青海は、長安から見て、玉門関のずつと手前に当るから、すなわち、承句の地点は、起句の青海

から玉門関を通り過ぎてずつと西の方に入りこんだところ、というもつてまわった解釈になっている。『唐詩訓解』にも見えない、本書独自の説である。素直にとれば、承句は、青海からはるか西方に玉門関を望むということで、現代の諸注もそのように解している。

日野氏の主張は明快で、起句の「青海」は「玉門関」のずつと東にあるのだから、承句で兵士は東の「青海」から西の「玉門関」を望んでいるはずだ、というものです。この場合、兵士はまだ玉門関を越えていませんので、転句「黄沙百戰穿金甲」は「たとえ黄沙の中で百戦して堅いよろい穴が空いたとしても」という風に、逆接の仮定条件として読むことになるでしょう。仮定の副詞が省略されることは、漢詩では珍しくありませんので、日野氏の解釈も十分に成り立ちます。

このように「従軍行」の承句は、兵士が玉門関を東から見ているか、西から見ていてかで解釈が分かれております。果たして、兵士はどちらから見ているのでしょうか。結論を先に申しておきますと、どちらから見てもよいと私は考えています。あるいは、承句の「孤城」という語は、ぼつんと最前線にそびえる砦のイメージを喚起させるので、東から見ているという解釈はおかしい、と思われた方がいるかもしれません。ただ、「孤城」だからといって、必ずしも玉門関より西の戦闘地帯にあるわけではありません。【資料B-③】を御覧ください。これは、明の唐汝詢が王昌齡の「従軍行」につけた注釈です。

哥舒翰嘗築城青海。其地与雪山相接。戍者思婦、故登城而望玉関、求生入也。(哥舒翰嘗て城を青海に築く。其の地は雪山と相接す。戍る者婦るを思ひ、故に城に登りて玉関を望み、生きて入るを求むるなり。)

哥舒翰というのは唐の將軍です。この注を現代語に訳しますと、「哥舒翰はかつて砦を青海に築いた。その地は雪山と接している。守備兵は帰りたいと思ったので、砦の城壁に登って玉門関の方を望み、生きてあの門をくぐりたいと思ったのだ」となります。

実はこれは少し奇妙な注釈でして、哥舒翰が青海に築いた砦を承句の「孤城」と同一視しているのに、「孤城」に登った守備兵は玉門関をくぐって帰りがっている、と説明されています。これでは守備兵は玉門関の西側にいることになり、青海との地理関係と矛盾してしましますが、この点については今は問題にしないでおきましょう。重要なのは、青海にも「孤城」が実際に存在したということです。哥舒翰が青海に砦を築いたのは、天寶七載(七四八)のことであり、王昌齡(六九八〜七五五)の同時代の出来事です。そうである以上、「孤城」という語を根拠にして、「従軍行」の兵士が、玉門関の東側にいるのか、西側にいるのかを限定することは、不適切なのではないかと思えます。

先に申しましたように、私の立場は、この詩の兵士は玉門関のどちら側にも存在しうるといえるものです。まず玉門関を東か

ら眺めていると仮定しましょう。そうすると、承句「孤城遙望玉門関」で兵士はまだ玉門関をくぐっておらず、自分がこれから進む方角を眺めていることになります。転句「黄沙百戰穿金甲」は「たとえ黄沙の中で百戦して堅いよろいに穴が空いたとしても」という仮定の条件節となり、結句「不破樓蘭終不還」は「樓蘭をうち破らぬうちは、断じて国には帰らないぞ」という勇ましい決意表明となります。この場合、兵士は戦鬪前の無傷の状態ということになりますね。

では、次に玉門関を西から眺めていると仮定しましょう。そうすると、承句の時点で兵士はすでに玉門関をくぐり終わっており、故国の方角を眺めていることになります。転句は「黄沙の中で百戦して堅いよろいにも穴が空いた」という既成事実となり、結句は「(それでも)樓蘭をうち破らぬうちは、断じて国には帰らないぞ」という悲壮な決意表明となります。この場合、兵士はすでに幾多の戦鬪を経た傷だらけの状態ということになるでしょう。承句で玉門関を眺めるのは、苦難に負けず樓蘭を破ってあの門を無事にくぐってやるぞという意気の表れとも、今すぐ故国に帰りたいという弱気の表れともとれますね。

このように、王昌齡の「従軍行」というテクストからは、意気軒高とした無傷の兵士と、ポロポロになった傷だらけの兵士とが、二重写しになって浮かびあがってきます。これこそが、この詩の醍醐味なのではないでしょうか。玉門関を西から見るか、東から見るかという二つの解釈を、互いに排除しあう対立関係としてとらえると、この詩のもつ多義性が失われてしまうのです。

ジャンルは違いますが、分かりやすい類例を挙げましょう。スライドを御覧ください。



この絵は目にしたことがある方も多いと思います。もともとはドイツの古いハガキに描かれていた作者不詳の絵であり、その後、ウイリアム・E・ヒルというイギリスの漫画家によってアレンジされ、アメリカの雑誌に掲載されました。スライドに映したのは、ヒルによってアレンジされたバージョンです。

髪の下にある半円とその中の点を「耳」、その左下の突起を「あご」、その右下の亀裂を「チョーカー」とみなすと、左奥を向いた若い女性の絵に見えます。ところが、女性の「耳」の部分分を「目」、「あご」の部分分を「鼻」、「チョーカー」の部分分を口とみなすと、あごのしゃくれた老婆に見えます。このように、若い女性と老婆のどちらにも見えるように書かれていること、それこそがこの絵の醍醐味なのです。

王昌齡「従軍行」の承句「孤城遙望玉門関」を「私は孤城からはるかに故国のかた、玉門関を望む」という風に、望む方角を限定して訳すというのは、あたかもこの絵に「若い女性」というキャプションをつけるようなものです。それに対し、「いや、これは若い女性の絵ではない。老婆の絵だ」と反論するのがナンセンスであるように、玉門関を兵士が西から見ているのか、東から見ているのかを、二者択一的に議論するのもまた無意味でしょう。「従軍行」は、揺れ動く多義的なテキストとしてあるのですから。

#### 四、「サヨナラ」ダケガ人生ダ」から「酒を飲む」のか？

次が本日御紹介する最後の詩になります。【資料C】を御覧ください。これは、晩唐の于武陵「勸酒（酒を飲む）」という詩です。この詩も「従軍行」と同様、『唐詩選』に収録されていますので、日本でも比較的有名であり、現代でも漢詩のアンソロジーによく採られています。まずは詩の書き下し文を読んでみましょう。五言絶句ですので、これで全文になります。

勸君金屈卮	君に飲む	金屈卮
滿酌不須辭	満酌 辞するを須みず	
花發多風雨	花發 ば風雨多し	
人生足別離	人生 別離足る	

この詩を、井伏鱒二は『厄除け詩集』の中で次のように翻訳しています。<sup>15)</sup>

コノサカヅキヲ受ケテクレ

ドウヅナミナミツガシテオクレ

ハナニアラシノタトヘモアルゾ

「サヨナラ」ダケガ人生ダ

この井伏訳は、漢詩の代表的な名訳として、広く人口に膾炙しています。学生に聞いてみると、「サヨナラ」ダケガ人生ダ」という文句は知っているが、于武陵のオリジナルは知らなかったと答えられることも珍しくありません。井伏訳が一篇の詩として独り歩きしている状態ですね。

もちろん、井伏訳以外にも、この「勸酒」には様々な訳のバリエーションがあります。今でも市販されていて、読みやすいものを一つ御紹介しましょう。【資料C-①】を御覧ください。【資料B-①】と同じく、前野直彬注解『唐詩選』からの抜粋です。<sup>16)</sup>

君にすすめる黄金のさかずき、なみなみとついでこの酒を、辞退などするものではないよ。この世の中は、花が咲けば、とかく雨風が強いもの、人が生きて行くうちには、別離ばかりが多いものだ（さあ、くよくよせずに飲みほしたまえ）。

この訳を読んで気づくのは、余計とも思える一文がつけ加え

られていることです。末尾に「さあ、くよくよせずに飲みほしたまえ」という文が（ ）に入れられています。詩の原文には、これに該当する語は見当たりません。このようなつけ足しを見ると、私はいつも反語表現の模範訳「〜であろうか（いや、〜ない）」を思い出します。訳者としては、読者に対する親切心から一言添えたつもりかもしれませんが、それがテキストの自由な読みを阻害する結果になってはいないでしょうか。

また、前野氏は「勸酒」について「友人との別離に際し、別の杯をすすめながら作った詩」という風に【資料C-①】で解説されています。この読み方に対し、石川忠久編『漢詩鑑賞事典』は、「勸酒」の鑑賞文の中で異なる意見を提示しています。【資料C-②】を御覧ください。<sup>20)</sup>

この詩を、別れの酒をすすめる詩とする説もあるが、ここでは採らない。むしろ、題に示されるように、酒をすすめること自体に重点があると見る。したがって、今、目の前にくりひろげられている酒宴は、あくまでも心楽しいものである。

確かに、この詩の題には「○○に別る」や「○○を送る」といった、「友人との別離」を思わせる語は含まれていません。あくまで題は「酒を勧む」です。ただ、この「酒」が「別れの杯」なのか、そうでないのか、という議論もまた、あまり建設的ではないように思います。結句の「人生 別離足る」は、友人との別れの時が不可避的に訪れるであろうことを予感させま



す。その「時」は、あるいはこの酒宴が終わった時かもしれない。そんな。そうである以上、「友人との別離」の酒宴であることと、「心楽しい」酒宴であることは、必ずしも対立する関係にはないでしょう。「心楽しい別離の酒宴」、そういった酒宴があつてもよいではないですか。

この短い詩に描かれた酒宴の様相は、読む人によつて異なっているはずですが、たとえば、承句に「満酌 辞するを須めず」とありますが、会場の皆さまは、なぜ「辞するを須めず」（辞退するには及ばない）なのか、その理由は何とお考えになりますか。おそらく、人それぞれではないかと思えます。

「満酌」のお酒が入った「金屈卮」は、前野氏の注によれば「黄金製の酒杯の一種で、椀のような形をし、柄がついており、それを持つて飲むもの。せいたくな酒器」です。ということ、中に注がれているお酒も、きつと高価なお酒ではないかと想像できますね。ここに重点を置きますと、「辞するを須めず」には、「高価なお酒だけれど」遠慮するには及びませんよ」というニュアンスが付与されます。この読み方をした場合、酒宴は始まつたばかりのように感じられます。

別の読み方もまた可能です。承句を「いえいえ、もう十分頂きました。これ以上は飲めませんよ」と断っている「君」に対し、「まあ、そう言わないで」辞退するには及びませんよ」とさらに飲ませようとする台詞とも解釈できます。この場合、すでに酒宴はたけなわということになりますね。

このように、承句の読み方にもなつて、酒宴は異なる様相を見せます。こうしたテクストの重層性こそが「勸酒」の魅力

の一つであると思つていますが、往々にして、この詩の解釈はAかBかの対立の構図でとらえられ、「辞するを須めず」の理由も「だから」と限定的に説明されています。【資料C-③】を御覧ください。平野彦次郎氏は「勸酒」の後半二句の解釈について、次のように整理されています。

「花發多風雨 人生足別離」に就いて この二句は二様の解がある。

(イ) 佳景長くし難し（故に花ある中に楽しもう）、良会再びし難し（故に逢つた時に楽しもう）と、二事対等に見て、そういう理由で花あり友ある今の時に酒を飲まねばならないと解する。

(ロ) 花發多風雨は比喻に用いたもので、折角開いた花も風雨が散らすように、人生には別離があるから、逢つた時に楽しまねばならないと人生足別離の句を主とする。

右の両説はいずれも成立する。

平野氏の「右の両説はいずれも成立する」という考え方に、私は賛成です。ただ、一つ付言するとすれば、同時にも成立すると思えます。(イ)と(ロ)両説の違いは、花は実際に咲いているのか、それとも比喻に用いられているのか、という点に集約できるでしょう。しかし、酒宴の場に花が実際に咲き誇っていると見た上で、その花もやがては風雨に散ってしまうことを人生の別離にたとえた、という考え方もできるのではないで

しようか。

もう一つ、注意したいのは（イ）と（ロ）両説の共通項です。それは、どちらも「酒を勧む」理由を詩の後半部に求めていることです。「花が咲いているこの美しい光景も長くは続かない（あるいは、友との酒宴も次はいつ開けるか分からない）、だから、そこ今はお酒を飲んで楽しもう」という風に、詩の後半部を「理由」、前半部を「帰結」とする読み方。これも一種の対立の構図といえるでしょう。

「勸酒」がこのような構図で読まれることは珍しくありません。一例を挙げましょう。【資料C④】を御覧ください。横山伊勢雄氏は、『唐詩の鑑賞―珠玉の百首選』の中で「勸酒」を取り上げ、次のように解説されています。

この杯を辞退する必要はないという理由は、後半の二句に述べられている。花が美しく咲いたとて、その美しさを誇る間もなく風雨が吹き散らしてしまう。自然におけるこの変化の強制、「月にむら雲、花に風」の無情は、人生において別離の遍在という形において現われる。かくそれが避けたいものであるならば何も悲哀に沈むことはあるまい。会えば別れるのが人生ならば、別れたらまた会えるのも人生のはずだ。明るく飲んで別れよう。この含意が転結の二句にあり、金屈扈と呼応していると、私は見る。

このように、「勸酒」の後半二句は、しばしば酒を勧める「理由」とみなされます。しかし、必ずしもそう考えなくてもよい

のではないでしょう。か。「花発けば風雨多し、人生別離足る」という感慨は、友人に酒を勧め、ともに楽しむという行為によって結果的に生じた、と考えることもできるはず。友人と酒を酌みかわし、楽しい時間を過ごしていたら、ふと満開の花が目に入り、「ああ、この花もいずれば散るよう、この楽しい時もいずれば終わるのだらう。とかく人生には別離が多いものだ」という認識に帰結する、このような読み方も「勸酒」というテクストは許容します。

この詩において重要なのは、前半と後半との因果関係ではなく、その間にある断絶ではないかと私は思います。断絶は、裂け目と言いつてもよいでしょう。絶句の構成は「起承転結」とよく説明されますが、すぐれた絶句の場合、「起承」と「転結」の間に、ちょうどよい幅の裂け目があります。幅が広すぎると、読者はどうしても裂け目を越えられず、置いてけぼりにされてきてしまい、拍子抜けしてしまいます。

それに対し、すぐれた絶句に仕込まれた裂け目は、読者がちょうど自力で飛び越えられるレベルの幅なのです。詩の原文になる言葉をあこれと必要以上に補って、論理的に分かりやすく翻訳するという行為は、いふならば、この裂け目に橋を架け、「さあ、この橋を渡ってください」と読者を誘導するようなものではないでしょうか。裂け目をどう越えるか、あるいはどう埋めるかは、読者の想像力にまかせるべきだと私は思います。裂け目の幅をなるべく維持するよう留意しながら、テクストを別の言語体系に置き換えること、訳者に必要なのはそのような態度ではない

でしょうか。「勸酒」もまた、前半から後半へのダイナミックな転換そのものに妙味があるのですから、その間に論理的な整合性をつけて訳出する必要などないのです。

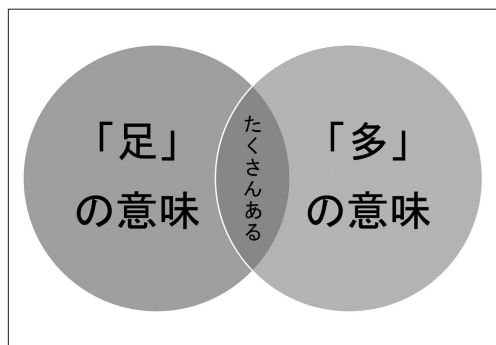
もう一つ、「勸酒」の妙味として挙げられるのは、一篇が「人生 別離足る」で結ばれることによって生じる余韻です。この詩の前半と後半を入れかえて、「花発多風雨、人生足別離。勸君金屈卮、満酌不須辞」としてみたら如何でしょうか。この方が、前半で理由、後半で帰結を述べた散文として、意味の伝達はよりスムーズになります。しかし、これでは韻文としての余韻は皆無ですね。また、先ほど紹介した前野氏の訳では、末尾に「さあ、くよくよせずに飲みほしたまえ」という一言が加えられていました。こうした余計な訳文も、ノイズとして原詩の余韻を損なわせます。そう考えると、井伏鱒二の『サヨナラ』ダケガ人生ダ』は、まさにこの余韻を最大限に生かした名訳といえるでしょう。

最後に問題にしたいのは、「人生 別離足る」の「足る」の意味についてです。【資料C-①】前野直彬注解『唐詩選』では、この「足」に「たっぷりある。多いこと」と注がついています。また、松浦友久編『校注唐詩解釈辞典』にも、于武陵「勸酒」の項に、こう書かれています。

#### 人生足別離

良会はなかなか得がたいことをいう。この「足」は、多・満の意。従って「足し」と読んでもよい。「多」の字を二度使用することを意識的に避けたものであろう。

確かに、辞書で「足」を引くと、「多い」という意味が載っています。しかし、だからといって、「人生足別離」の「足」を「多」とイコールで結んでよいものでしょうか。ここで、「足」と「多」の字義上の重なりを、ベン図で示してみましよう。前のスライドを御覧ください。



このように、「足」と「多」は、「たくさんある」という意味を共有しています。もしかすると、『校注唐詩解釈辞典』が指摘するように、于武陵は「花発多風雨」の「多」と重複するのを避けるため、便宜的に「足」を「多」の意味に用いただけな

のかもしれない。しかし、たとえそうだとしても、「人生足別離」の「足る」からは、ベン図の左の円のうち、右の円と重ならない部分、すなわち「足」という漢字の方だけがもっている「十分だ」「満ちている」等の意味もまた、作者の意図を無視して醸しだされ、読者の読みに影響を及ぼします。「人生」という器の中が、もう十分と思えるほど「別離」で満ちている、そのような感慨を「人生 別離足る」から読みとった読者もいるはずです。少なくとも、「サヨナラ」ダケガ人生ダ」と訳した井伏鱒二はその一人でしょう。

ところで、私はよく、名作の文字をいじって台無しにするという一人遊びをするのですが、ひとつ「勧酒」を使ってこの遊びを披露しましょう。もし「花発多風雨」の「多」と「人生足別離」の「足」とが同じ意味であるというのなら、理論的には両者は入れ替えが可能はずですね。試しに入れ替えてみましょう。こうなります。

勸君金屈厄	君に勧む	金屈厄 <small>きんくつじ</small>
満酌不須辞	満酌 <small>まんしやく</small> 辞 <small>ことば</small> するを須 <small>もと</small> めず	
花発足風雨	花発 <small>はなはら</small> けば風雨 <small>かぜあめ</small> 足る	
人生多別離	人生 別離多し	

如何でしょう。何だか名作が台無しになった感じがしませんか。「花発けば風雨足る」にはどこか違和感を覚えますし、「人生 別離多し」に至っては、自明のことをひねりもなく叙述したに過ぎず、原作の余韻が著しく損なわれたような印象を受け

ます。この改変版からは、井伏鱒二の名訳はきつと生まれなかつたでしょう。たとえ意味内容が変わらないとしても、やはり詩の言語というものは、置き換え不能なのです。

## 五、まとめ

時間が迫りましたので、まとめに入りました。二点に集約しました。

①漢詩においては、一字一字の意味の広がり、語と語の曖昧な結びつき、句と句の間の唐突な飛躍がしばしばテキストに揺さぶりをかける。この振り幅こそが漢詩の魅力の一つである。

②漢詩を書いているとおりに読もう。

①については、「本日お話す内容の要点」①として挙げた「漢詩を読むとき、二つの項目（二つの異なる解釈や、原因と結果など）を対立としてとらえると、その対立が時にはノイズとなつて鑑賞を妨げる」を、本日お話しした内容を踏まえた上で、別の観点から書き直したものと考えください。②は、「本日お話す内容の要点」②と同じです。会場の皆さまには、「漢詩を書いてあるとおりに読む」ということの意味を、実例を通して何となく了解して頂けたのではないかと思います。それではちょうど時間が来ましたので、本日の講演はこれで終了させていただきます。御清聴ありがとうございました。

注

- (1) 『広辞苑』第七版(岩波書店、二〇一八年)より「二項対立」の項。
- (2) 原文は「項王軍壁垓下。兵少食尽。漢軍及諸侯兵圍之数重。夜間漢軍四面皆楚歌、項王乃大驚曰、漢皆已得楚乎。是何楚人之多也。項王則夜起飲帳中。有美人、名虞。常幸從。駿馬、名騶。常騎之。於是、項王乃悲歌慷慨、自為詩曰。」  
『筑摩書房版 古典 学習指導の研究 4 漢文編(一)』(筑摩書房、二〇〇四年)七五頁。
- (3) 『高等学校 古典B 漢文編 指導と研究』第2分冊(第一学習社、二〇一四年)三四頁。
- (4) 谷本文男・小原広行『精説漢文』(いわずな書店、二〇一四年)五八頁。
- (5) 内田泉之助『古詩源』上(集英社、一九六四年)六七頁。
- (6) 安藤信廣『漢文を読む本』(三省堂、一九八九年)二六頁。
- (7) 注(3)前掲書、七四頁。
- (8) 王利器主編『史記注訳』(三秦出版社、一九八八年)一九三頁。なお、原文は簡体字表記だが、本稿では便宜的に繁体字に改めました。
- (9) 楊燕起注訳『史記全訳』(貴州人民出版社、二〇〇一年)三八頁。なお、原文は簡体字表記だが、本稿では便宜的に繁体字に改めました。
- (10) 『二十四史全訳 史記』(漢語大詞典出版社、二〇〇四年)一一七頁。
- (11) 前野直彬注解『唐詩選』下(岩波書店、一九六三年)一六三頁。
- (12) 一海知義『漢詩一日一首』(平凡社、一九七六年)四五六頁。
- (13) 日野龍夫校注『唐詩選国字解』3(平凡社、一九八二年)一三四頁。『唐詩選国字解』は、江戸時代中期に刊行された『唐詩選』の注釈書。服部南郭による『唐詩選』の講釈を、門人が筆録したノートがもとになって成立しました。
- (14) 王昌齡とはほ同時代の詩人である王之涣の「涼州詞」に「黄河遠上白雲間、一片孤城万仞山。羌笛何須怨楊柳、春光不度玉門関(黄河遠く上る白雲の間、一片の孤城万仞の山。羌笛何ぞ須るん楊柳を怨むを、春光度らず玉門関)」とあります。この詩の「孤城」は、結句「春光不度玉門関」(春の光は玉門関を越えてはこない)から見るに、玉門関よりさらに西方にあるように感じられます。
- (15) 明・唐汝詢『唐詩解』卷二六(河北大学出版社、二〇〇一年)六四九〜六五〇頁。
- (16) 『新唐書』卷一三五「哥舒翰伝」に「踰年、築神威軍青海上、吐蕃攻破之。更築於龍駒島、有白龍見、因号応龍城」とあります。これによると、哥舒翰は青海のほとりにまず砦を築き、ついで青海の龍駒島にもう一つ砦を築いたようです。
- (17) 井伏鱒二『厄除け詩集』(筑摩書房、一九七七年)四五頁。なお、初版は一九三七年に野田書房から刊行。筑摩書房版は、井伏自身による校正を経た改訂版です。
- (18) 注(12)前掲書、一〇九〜一一〇頁。
- (19) 石川忠久編『漢詩鑑賞事典』(講談社、二〇〇九年)五五九頁。
- (20) 平野彦次郎『唐詩選研究』(明徳出版社、一九七四年)二四一頁。

(22) 横山伊勢雄『唐詩の鑑賞―珠玉の百首選』（ぎょうせい、一九七八年）三九九頁。

(23) 松浦友久編『校注 唐詩解釈辞典』（大修館書店、一九八七年）十八頁。

(24) たとえば、『全訳 漢辞海』第四版（三省堂、二〇一七年）「足」項には、形容詞①の④に「多い」とあり、北周・庾信「周大將軍司馬神道碑銘」の「山空足雲（山空しきも雲足る）」が、用例として引かれています（一三九一頁）。

※本稿は、法政大学国文学会（二〇一七年七月二九日開催）における講演「ノイズとしての二項対立——漢詩をもっと自由に読むために——」を活字化したものです。活字化にあたって、大幅に修正の手を入れました。

※本稿の執筆にあたって、法政大学人文科学研究科修士課程の修了生であり、現役の高校教員である岡崎孝輝氏より、高校教科書に関連する資料や情報の提供など、多方面にわたって御助力を賜りました。この場を借りて御礼申し上げます。

（えんどう せいき・本学専任講師）



2017年度 法政大学国文学会大会